**伝和泉式部歌塚塔**

和泉式部（976-1036年頃）は宮廷女官で、平安時代（794-1185）の有名な文学者であった。和泉式部は特に、5-7-5-7-7の31音節からなる詩である和歌で知られている。この石造りの歌塚塔は、和泉式部を称え、彼女の最も有名な和歌の1つを残すために1233年に建立された。歌塚塔に刻まれた和歌は、1002年から1005年の間に詠まれたと考えられている。

暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月

この歌は、おなじみの詩的な比喩を用いて、苦しみと救いの関係を強調している。たとえば「月」は仏教の悟りの象徴であるが、性空上人自身の象徴でもある。この歌は、当時歌人にとって最高の栄誉である勅撰「拾遺和歌集」に収録された。

性空上人は和泉式部の歌に感動し、すぐに返歌を返した。

日は入りて月はまだ出ぬたそがれに掲げて照らす法（のり）の燈（ともしび）

寺院の記録では、和泉式部は亡くなったとき、彼女が尊敬する性空上人から送られた衣を着ていたと言われている。